

# 古典の音読と文法

阿久津 智

## Oral Reading of the Japanese Classics and Grammar Learning

Satoru AKUTSU

### 要 旨

本稿では、古典文学の音読と文法（文構造）との関係について論じた。文構造は、プロソディー（イントネーションなど）に、ある程度反映される。隣り合う2つの文節が関係する（前の文節が後ろの文節に係る）ときには、イントネーションによって、1つの句（音調句）にまとまりやすい。文構造の違いは、意味の違いになり、それが読み方の違いに現れる場合もある。たとえば、『枕草子』の「春はあけぼの」において、「やうやう白くなりゆく」と「山ぎは」とを区切って（別の音調句として）読めば、別々の文となり（「やうやう白くなりゆく」のは「山ぎは」ではない）、つなげて（1つの音調句として）読めば、連体修飾となる（「やうやう白くなりゆく」のは「山ぎは」である）。文構造（意味）の違いは、必ずしも音読で表せるわけではないが、それでも、音読の仕方を考えることが、その文の構造や意味を考えることにつながると思われる。

キーワード：古典文法、音読、文構造、イントネーション、音調句

### 1. はじめに

本稿では、古典文学の音読と文法（文構造）との関わりについて考えていきたい。

近年、古典や名文の音読については、「素読」による「暗誦文化」の継承を促進する立場や、音読が「脳活動」を活発にし（「脳の活性化」を促し）、学習効果を高めるとする「脳科学」の立場などから、その重要性が語られることが多い<sup>(1)</sup>。

学校教育（国語教育）においては、「音読」や「朗読」によって、「古典特有のリズム」や「古文や漢文の調子など」を味わい、「古典の世界に触れる」、「古典の世界を楽しむ」こと、さらには、「古典を読み深める」ことが行われる。現行の『中学校学習指導要領』（平成20年3月）「国語」、『高等学校学習指導要領』（平成21年3月）「国語」には、次のように述べられている<sup>(2)</sup>（下線は筆者）。

- 文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること。(中学校〔第1学年〕2 内容〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕(1)ア(ア))
- 作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しむこと。(中学校〔第2学年〕2 内容〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕(1)ア(ア))
- 文章を読み深めるため、音読、朗読、暗唱などを取り入れること。(高等学校「国語総合」3 内容の取扱い (4)イ)
- 古文や漢文の調子などを味わいながら音読、朗読、暗唱をすること。(高等学校「古典 A」2 内容 (2)ア)
- 古典を読み深めるため、音読、朗読、暗唱などを取り入れるようにする。(高等学校「古典 B」3 内容の取扱い (2))<sup>(3)</sup>

これらによれば、古典の音読は、中学校では、「古典の世界」に興味をもつ（「触れる」、「楽しむ」）ことに重点があり、高校では、古典を「読み深める」ことを目的とするものようである<sup>(4)</sup>。

本稿では、古典を「読む」（意味をとる）という立場から、音読によって、文法（文構造）を学ぶ（あるいは、文法について考える）ということを考えてみたい。ここでは、音読を、（「特有のリズム」を）「味わう」ためのものというより、「読み深める」ためのものとして扱う。以下、まず、「音読」などの用語の定義と、音読を行う意義について触れ（2 節）、次に、古典語の音読における発音について述べ（3 節）、そのあと、文法（文構造）と音読との関わりについて考えていく（4 節）。なお、用例については、中学校で学ぶ古典文学作品を中心に上げる。

## 2. 「音読」の定義と意義

「音読」と「朗読」の定義（内容）については、『高等学校学習指導要領解説 国語編』（平成 22 年 6 月）に次のようにある（「暗唱」も合わせて挙げておく）。

「音読」とは、声を出して文章を読むことをいい、文章の内容や表現を理解し伝えることに重点がある。音読によって、文章特有のリズムに気付かせることも大切である。特に古文、漢文及び近代以降の詩歌などでは、音読することによって文章の調子に気付くことも多い。何回も繰り返し音読してそのリズムに慣れるよう指導することが大切である。

「朗読」とは、文章の思想や感情を十分に理解した上で、聞く人がよりよく理解

できるよう表現性を高めて読むことである。文章の読みが深いものであればあるほど、優れた朗読が可能となる。また、朗読することによって、読みが深まることも多い。

「暗唱」とは文章を読んで記憶した上で声に出すことである。文章を記憶することで、読みが深まることは多い。また、暗唱を行うことでより感情豊かに表現することが可能となる。（「国語総合」4 内容の取扱い (4)イ）

音読は「理解」に重点があり、朗読は「表現」に重点があるという違いはあるが、両者は「いわば一種の往復運動で…ある意味での連続性もある」（杉藤・森山 2007: 16）ものである。本稿では、両者を合わせて「音読」と呼んでおく<sup>(5)</sup>。

このほかに、『高等学校学習指導要領解説 国語編』にはないが、広い意味での「音読」に含まれるものに、「素読」と呼ばれる音読方法がある。これは、「文章の意味理解を後まわしにして、ひたすら朗誦していくやり方」（川島・安達 2004: 135）で、「素読の特色と思われる点」は、安達（2017: 34）によれば、次のとおりである。

- ① 文字や文章を、声にだして読んでいく（目と耳と口の総合）。
- ② 生徒がオウム返しに先生のまねをする場合もある（復唱）。
- ③ なんどもくりかえして読む（反復）。
- ④ 意味内容の説明はしないのがふつう（知性よりも感性重視）。
- ⑤ いつのまにか暗唱できるようになるとしても、最初から暗唱をめざさない。
- ⑥ 初歩の段階の学習として行われた。
- ⑦ その後もしかし、剣道の素振りや楽器の指練習とおなじで、ウォーミングアップになる。
- ⑧ 日常的な言語ではなく、古文や漢文（つまり古典）が中心。オランダ語や英語など、外国語習得にも応用された。
- ⑨ 中世以来さかんになり、江戸時代がピーク。明治以降は急速にすたれていった。
- ⑩ かつては諸外国でも古典や聖典をまなぶのにおなじ方法をもちい、現在もおなじ方法をとっているばあいが多い（仏教、ユダヤ教、イスラム教、ヒンズー教など）。

素読は、伝統文化の復活・継承をはかろうとする動きに加えて、「素読が脳の機能を高める」（川島・齋藤 2017: 17）という脳科学の知見の影響などもあり、近年、ブームが続いている<sup>(6)</sup>。

一方で、国語教育で音読に頼りすぎることに對しては、「音読はあくまでも音読でし

かない。そこにとどまっている限り、論理的・批判的な思考力は身につけていけない。音読ブームの背景に見えてくるのは、国語教育における方法論の弱さであり、指導方法の貧しさである。」(加藤 2008: 84) などといった批判もある。実際、たとえば、『枕草子』の「春はあけぼの」(第一段)を扱う場合、教育現場(中学校)では、「まず現代語訳で大意をつかませ、あとは朗読の繰り返しや暗唱、という授業が大半というのが実情であるようだ」が、このような学習が「内容を理解」することや「古人の考えを知ること」として行われているのではないかという懸念も示されている(有働 2015: 27, 28)。

古典の音読について、本稿では、文法(文構造)を考えて読むことに重点をおく。それは、音読(朗読)において、「文の意味を理解して伝達する」ためには、「文の基本的な構造を理解」して、「文を読むときに声で文法を実現できる能力」が必要であり、「イントネーションやプロミネンス [卓立] …も文法を基本としたことばの意味によって決まる」(渡辺 2012: 139, 141)ものだからである。この点については、素読(音読)を推奨する川島・齋藤(2017)も、「意味がよく分かって音読すると、分からずに音読する人とは抑揚のつけ方も変わります。意味が分かっている人の音読は相当の情報量が入っていて、それが聞く側に伝わる。」(齋藤の発言 p. 15),「古典の素読は、こちらから能動的に接していかないと意味を取ることができません。脳は能動的な状態の時によく働くことが分かっています。」(川島の発言 p. 24)などと述べている。いずれにしても、文章の内容や表現を理解して伝えるためには、文法(文構造)を考えて音読する必要があると思われる。

### 3. 古典語の音読における発音

日本の古典文学を音読するときには、それが「歴史的仮名遣い」(いわゆる「契沖仮名遣」以外の仮名遣いも含む)で書かれていても、現代語音に従って読むのが普通であり、それが自明のことになっている。教科書や参考書では、古典学習の初め(古典入門)に「歴史的仮名遣い」についての説明があり、そこには、歴史的仮名遣いで書かれた語を現代語の発音で読む方法が示されている。ただし、そこに、「歴史的仮名遣いは、平安時代中頃の発音(に基づいた表記)に基づく」ということが書かれることはあっても、「歴史的仮名遣いで書かれた文章は、現代語の発音によって読む」とははっきり書かれることは少ないようである<sup>7)</sup>。

古典語で書かれた文学作品を現代語の発音で読むという事情は、外国語でも同様のようで、たとえば、古典ギリシア語やラテン語については、「西欧ではそこ [長い文章や詩] に出てくるどの語についてもそれぞれの国のお国なまりで読むのが習わしになって」いて(風間 1998: 43),「ギリシア人が古典ギリシア語を読むときには現代ギリシア語の

発音が使われ」ている（荒木 2003: 4）という。古典中国語（漢文）についても、中国では現代語音で読まれている（日本では、「原文の漢字を一つ一つ目で追いながら日本語の語順にあわせて日本語に置きかえ」て読まれる（訓読される）（大島 2009: v））。ただし、これらの古典語の発音は、いずれも言語学的に推定されている。古典ギリシア語とラテン語については、「なるべく古典期のギリシア語、ラテン語の発音を忠実に守りたいという人たちが」おり（風間 1998: 43）<sup>(8)</sup>、古典中国語についても、漢字の古代音を推定する研究が進み、唐詩の唐代長安音による復元などが行われている（大島 2009: 164）<sup>(9)</sup>。

古典文学の古代日本語音による復元については、金田一春彦や森博達によるものがある（金田一 2001, 森 2015）。以下に、金田一（2001: 384）から、「平安時代の発音」による『枕草子』第一段<sup>(10)</sup>の冒頭部分を挙げる（アクセントは、上段（高）と下段（低）とで示す。漢字平仮名表記を、松尾聡・永井和子校注・訳『新編 日本古典文学全集 18 枕草子』（小学館 1997: 25）によって付ける）。

ル ファ アケボノ。 ウ ロ リ ユク ファ  
 ファ ウ ヤ ヤウ シ ク ナ イ ヤマギ  
 春 は あけぼの。 やうやう しろく なり ゆく 山 ぎは、  
 コ アカ テ ダ タ ソ タナビ タ  
 ス シ リ エ ムラサキ ティ ル クモノ フォ ク キ ル。  
 すこし あかりて、紫 だち たる 雲 の ほ そく たなびきたる。

（原著の「ホ」を「フォ」に改めた）

これは、一つの推定であり<sup>(11)</sup>、また、このような読み方が簡単にできるわけでもないが、一部なりとも、こういったものを聞くことができれば<sup>(12)</sup>、古典学習に対する興味が増すかもしれない。

とはいえ、古典文学の音読は、結局、現代語の発音によるしかない。以下、古典文学の音読を論じるに当たっては、すべて現代語の発音に従って読む場合のこととして、話を進めていく。

#### 4. 文法と音読

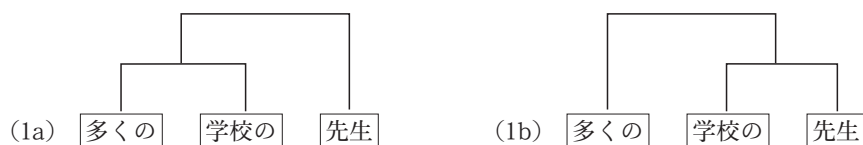
本節では、音読によって文法（文構造）を学ぶことを考えるため、文法（文構造）とプロソディー（イントネーションなど。音の高さ、長さ、強さなど）との関係を見ていきたい。まず、現代日本語（共通語）における文法（文構造）とプロソディーとの関係を述べ、次いで、現代語で古典文学を読む際のプロソディーについて考えていく。

#### 4.1 文法とプロソディー

まず、文法（文構造）とプロソディーについて、文構造とイントネーションとの関係を取り上げる。イントネーションには、主な機能として、(1)話者の表現意図や気持ちを表す（例：疑問文には上昇調が現れやすい）、(2)句のまとまりを作る（例：前の文節が後ろの文節を限定（修飾）するとき、1つの句にまとまりやすい）、の2つがある<sup>(13)</sup>。ここでは、文構造に関わる後者について、文法（構造）的なあいまい性（ambiguity）をもつ文（現代語）を例にして、文構造とイントネーションとの関係を見ていく（以下の例の説明は、阿久津 2009 による）。

(1) 多くの学校の先生が集まった。

(1)は、(1a)「多くの学校から先生が集まった」（多いのは学校）という解釈と、(1b)「学校の先生が多く集まった」（多いのは先生）という解釈とが可能である。これは、本来異なる構造を持つ（「係り受け」の関係が異なる）文が表面上同じ形で現れたためである。「多くの学校の先生」の部分について、(1a)の構造（[[多くの学校]の先生]（文節・連文節単位では、[[多くの学校の]先生]）と(1b)の構造（[多くの[学校の先生]]）とは、たとえば、次のように図示することができる（文節単位。「先生が」の「が」は省略する）。



両者の違いは、話し言葉では、イントネーションによって表すことができる（ただし、それが伝わるかどうかは、聞き手にもよる）。以下に、音の高低変化を視覚化したピッチ曲線を挙げる<sup>(14)</sup>（以下、ピッチ曲線の下のカタカナは、表音式表記である）。

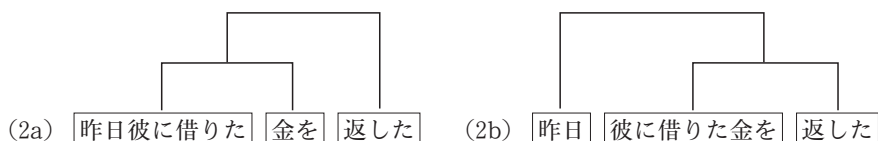


(1a)と(1b)とでは、ポーズのおかれる位置が異なり、イントネーションによる句（音調句）のまとまり方が異なっている。(1a)では「多くの学校の／先生が集まった」、

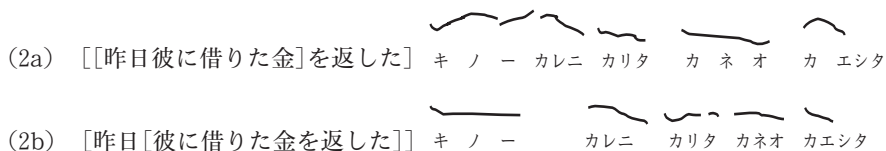
(1b)では「多くの／学校の先生が集まった」のようにになっている（「／」は、音調句による大きな区切り）。

(2) 昨日彼に借りた金を返した。

(2)は、(2a)「昨日彼に金を借り、その金を（今日）返した」（金を借りたのが昨日）という解釈と、(2b)「（以前）彼に借りた金を、昨日返した」（金を返したのが昨日）という解釈とが可能である。(2a)の構造（[[昨日彼に借りた金]を返した]（文節・連文節単位では、[[昨日彼に借りた金を]返した]]）と(2b)の構造（[昨日[彼に借りた金を返した]]）とは、たとえば、次のように図示することができる（文節単位。一部連文節にまとめて示す）。



両者の違いは、話し言葉では、イントネーションによって表すことができる。



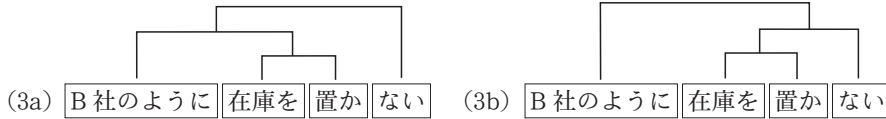
(2a)と(2b)とでは、ポーズのおかれる位置が異なり、音調句のまとまり方が異なっている。(2a)では「昨日彼に借りた金を／返した」、(2b)では「昨日／彼に借りた金を返した」のようにになっている。

以上は、イントネーションで意味（解釈）の違いを表すことのできる例であるが、次の(3)は、意味（解釈）の違いをイントネーションで表すことができない。

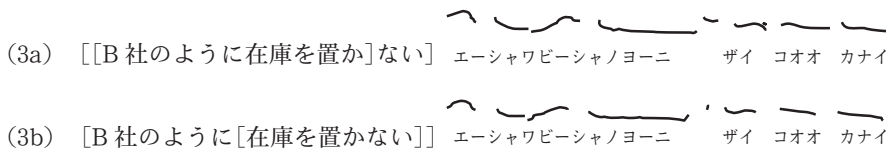
(3) A社はB社のように在庫を置かない。

(3)は、(3a)「A社は、B社とは異なり、在庫を置かない」（B社は在庫を置く）という解釈と、(3b)「A社は、B社と同じで、在庫を置かない」（B社は在庫を置かない）という解釈とが可能である。この両者の構造の違いについては、文節レベルでは示すことができず、単語（形態素）レベルに分けて示す（「置かない」を、「置か」と「ない」

とに分ける) 必要が出てくる。以下に、「B 社のように在庫を置かない」の部分について、(3a)の構造（[[B 社のように在庫を置か] ない]）と(3b)の構造（[B 社のように[在庫を置かない]]）とを図示する。



このレベルの場合、両者の違いをイントネーションによって表すことができない。



これは、イントネーションによって文構造（係り受け）を表すには、文法の単位とプロソディーの単位とが一致しなければならず、それが可能なのは、文節レベルまでだということを示している。文節は、アクセントによるまとまり（アクセント句）や、イントネーションによるまとまり（音調句）になりうる最小の単位であり<sup>(15)</sup>、それより小さな（文節を作れない）単位になると、そのようなまとまりを作ることはできなくなる。つまり、文節を作れない単語（形態素）レベルにおける構造の違いは、イントネーションによって表すことができないということになる。

以上は、現代語における、文構造とイントネーションとの関係を示す例（文構造の違いをイントネーションによって表せる場合と表せない場合）である<sup>(16)</sup>。一般化して言えば、次のようになる。

#### [文節の関係]

- ① 隣り合う 2 つの文節が関係する（「係り受け」（並立を含む）で続く）とき、これらの文節は 1 つの句（音調句）にまとまりやすい。
- ② 隣り合う 2 つの文節が関係しない（切れる（中止を含む）、または、前の文節の係り先が後ろの文節より後にある）とき、これらの文節は 1 つの句にまとまらない。

#### [文節より小さい単位の間関係]

- ③ 文節より小さい単位に分けないと示せない関係は、イントネーション（音調句）では表せない。



これらは、古典文学を現代語で音読する場合にも当てはまるものと思われる。これについては、次項で見ていきたい。

## 4.2 古典の音読における文法とプロソディー

次に、前項で見た、文構造とイントネーションとの関係をふまえて、古典文学の音読について考えていく。ここでは、文章の内容や表現を理解し伝えるため、多少大げさに、（プロソディーによって）表情をつけて読む場合のことを考える。以下、主に中学校で学ぶ作品から、解釈にゆれがある（ゆれが起こりうる）例を挙げて、文構造を考えて音読することを考えていく。

### 4.2.1 『枕草子』第一段「春はあけぼの」

まず、『枕草子』第一段の冒頭部分について考える。

（４） 春はあけぼの。やうやうしろくなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。（『新編 日本古典文学全集 18 枕草子』 p. 25）

（４）について考えたいのは、次の２点である。

（ア）「春はあけぼの」の後で、（a）切れる か、（b）続く（後ろに係る）か。

（a）の場合、「春はあけぼの」は、これだけで文となる。

（b）の場合、「春はあけぼの」は、時を表す連用修飾成分となる。

（イ）「…なりゆく」の後で、（c）切れる か、（d）続く（後ろに係る）か。

（c）の場合、「…なりゆく」は、ここまでで文となる。

（d）の場合、「…なりゆく」は、連体修飾成分となる。

（ア）と（イ）とを組み合わせると４通りの文構造が考えられるが、このいずれの解釈も可能であろう。この４つの違いは、音声ではイントネーションで、表記上では句読点で示することができる。以下に、それぞれについて、構造を図示したもの（句読点付き）、筆者の発話によるピッチ曲線（イントネーション）<sup>(17)</sup>、現代語訳を挙げる。現代語訳は、それぞれの解釈をとっていると思われる文献から引用する（4bcを除く）。本文の表記（句読点以外）は、『新編 日本古典文学全集』による<sup>(18)</sup>（以下、引用文献にあるルビは、一部を除いて、省略する）。

- (4ac) 春はあけぼの。やうやうしろくなりゆく。山ぎは、すこしあかりて、…  
 春では夜明方がよい。曙の霞んだ空が段々に白んでゆくのが面白い。東の山際のところだけが、少しぼつと赤るんで、…(佐藤 1937: 11)



- (4ad) 春はあけぼの。やうやうしろくなりゆく。山ぎは、すこしあかりて、…  
 春はあけぼの。だんだん白んでくっきりとしてゆく山ぎわが、少し赤みを帯び明るくなって、…(『新編 日本古典文学全集 18』 p. 25)  
 春は夜明け！ だんだん白んでゆく山ぎわの空がほんのり明るくなって、…(山口 2008: 208)



- (4bc) 春はあけぼの、やうやうしろくなりゆく。山ぎは、すこしあかりて、…  
 春の明け方に、空がだんだん白んでゆく。山際が少し明るくなって、…(筆者訳)



- (4bd) 春はあけぼの、やうやうしろくなりゆく。山ぎは、すこしあかりて、…  
 春の明け方、次第にはっきりと見えて来る山際が少し明るくなって、…(柳田 2016: 120. 同書の本文では、「山ぎは」の後に読点を入れていない)



上のうち、最も一般的な解釈は、(4ad)のようである。『新編 日本古典文学全集』もそうであるが、本文を同書によっている「国語総合」の教科書（以下、すべて平成 24 年 3 月検定済）にも、これと同様の句読点の付け方をしているものが多い（東京書籍『新編国語総合』、教育出版『国語総合』、三省堂『精選国語総合』など）<sup>(19)</sup>。すなわち、「春はあけぼの。」を 1 つの文と考え<sup>(20)</sup>、「…なりゆく」を「山ぎは」にかかる連体修飾成分と考えるのが最も一般的なようである<sup>(21)</sup>。

いずれの読みがよりよい解釈（あるいは、本来のもの）であるかはさておき、文構造の違いによって、その文の表す意味が変わり、それによって音読の仕方も変わるという

ことは、その文をどう声に出して読むかを考えることが、その文の構造を考えることになり、また、その文の意味を考えることになるということである。仮に音読によって文構造（意味）の違いを表す（読み分ける）ことが難しい場合でも、音読の仕方を考えることが、文法（文構造）について考えることになると思われる。

#### 4.2.2 『徒然草』序段「つれづれなるままに」

続いて、『徒然草』序段の冒頭部分について考える。

（５） つれづれなるままに、日くらし硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（『新編 日本古典文学全集 44 方丈記・徒然草・正法眼蔵随聞記・歎異抄』（『徒然草』永積安明校注・訳）小学館 1995: 81）


（５）について考えたいのは、次の点である。

ア 「日くらし」の後で、(a)切れる か、(b)続く（後ろに係る）か。


(a)の場合、「日くらし」は、動詞（述語、連用中止法）となる。

(b)の場合、「日くらし」は、副詞（連用修飾語）となる。

この両者の違いは、音声ではイントネーションで、表記上では句読点で示すことができる。以下に、それぞれについて、構造を図示したもの（句読点付き）、筆者の発話によるピッチ曲線（イントネーション）<sup>(22)</sup>、現代語訳を挙げる。本文の表記（句読点以外）は、『新編 日本古典文学全集』による。

(5a)  つれづれなるままに、日くらし、硯にむかひて、…  
何もすることがなく手持ちぶさたなのにならして一日を過ごし、硯に向かって、…  
（筆者訳）



(5b)  つれづれなるままに、日くらし、硯にむかひて、…

なすこともない所在なさ、ものさびしさにまかせて、終日、硯に向かって、…  
 (『新編 日本古典文学全集 44』p.81)

無聊孤独であるのに任せて、一日中、硯と向かい合って、… (小川 2015: 272)

ツ レ ズ レ ナ ル マ マ ニ                      ヒ ク ラ シ ス ズ リ ニ ム カ イ テ

両者のうち、一般的な解釈は、(5b)のようである<sup>(23)</sup>。『新編 日本古典文学全集』もそうであるが、「国語総合」の教科書にも、これと同様の句読点の打ち方をしているものが多い(桐原書店『国語総合』、三省堂『精選国語総合』、第一学習社『高等学校 標準国語総合』、明治書院『高等学校 国語総合』など)。また、これらと異なり、「日くらし」の後に読点を打っているものでも、ほとんどが「日くらし」を「終日」の意味(副詞)にとっている(教育出版『国語総合』、数研出版『高等学校 国語総合』、東京書籍『新編国語総合』、筑摩書房『国語総合』など)。「日くらし」の後の読点は、読みやすくするために(たとえば、「日くらし硯」(1語)と読まれることなどを防ぐために)打たれたものかとも思われる<sup>(24)</sup>。

(5a)に関しては、中古の文学作品に、「日暮らす」(動詞、あるいは、「日」(名詞)+「暮らす」(動詞))を使った例が見られる<sup>(25)</sup>ため、この解釈もできないことはないと思われる。しかし、小池(2005: 114)によれば、『徒然草』の一部は『枕草子』の文体模写であり、「日暮らし」については、『枕草子』に「講はじまりて、舞ひなどす。日暮らし見るに、目もたゆく苦し。」(『新編 日本古典文学全集 18』p.415による「日暮らし」の現代語訳は、「一日中」)という表現が見られるという。この説に従えば、『枕草子』にある「日暮らし」は副詞ととれるため<sup>(26)</sup>、『徒然草』の「日くらし」も副詞ということになるだろう。

#### 4.2.3 『徒然草』第七段「あだし野の露きゆるときなく」

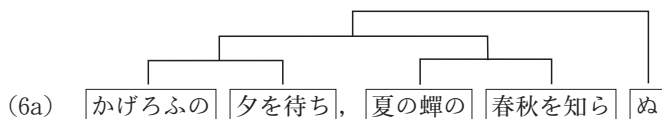
これまで見てきた例は、文構造の違いをイントネーションで表すことのできる例、つまり、音読で意味の違いが示せる例であったが、ここでは、文構造の違いをイントネーションで表すことのできない例(音読で意味の違いが示せない例)を取り上げる。これは、「4.1 文法とプロソディー」で見た「文節より小さい単位に分けないと示せない関係」を含むものである。

『徒然草』第七段から例を挙げる。

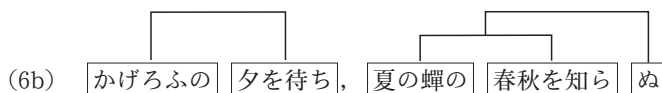
(6) かげろふの夕を待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。

(訳: カゲロウが夕方を待たずに死に、夏に生きる蟬が春と秋を知らないようなこともあるのだ。)(小西 2016: 442)

この文では、「かげろふの夕を待」つことと、「夏の蟬の春秋を知」ることの両方を否定している。その構造は、次の(6a)のように図示することができるであろう（「かげろふの夕を待ち、夏の蟬の春秋を知らぬ」の部分のみを示す）。



これを、「カゲロウが夕方を待つし、夏の蟬が春と秋を知らないようなものもあるのだ」（小西 2016: 441）というように解釈すると、その構造は、次の(6b)のように図示されることになるであろう。



(6a)のような構造を、小西甚一は「ならびの修飾」と名づけている（小西 2016: 442）<sup>(27)</sup>。(6a)のような「ならびの修飾」と、(6b)のような（ただの）並立とは、文節から否定辞（日本語の学校文法では、打ち消しの助動詞）を切り出さないと（文節より小さい単位に分けないと）、その構造の違いを示せないため、その違いをイントネーションで区別することはできない。

ほかに、これにやや似た、否定辞が何を（どこまで）否定しているか（否定のスコープ）がわかりにくい例は、韓愈の『雑説』にも見られる（『雑説』は、教育出版『国語総合』、桐原書店『国語総合』、三省堂『精選国語総合』、数研出版『高等学校 国語総合』、筑摩書房『国語総合』などに採録されている<sup>(28)</sup>）。

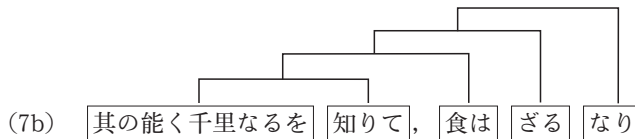
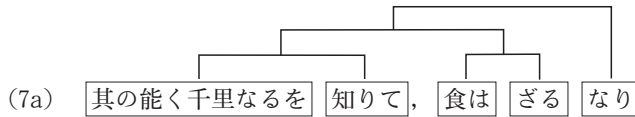
(7) 食<sub>レ</sub>馬<sub>ヲ</sub>者。不<sub>ル</sub>知<sub>リ</sub>テ<sub>ニ</sub>其<sub>ノ</sub>能<sub>ク</sub>千里<sub>ナル</sub>ヲ<sub>ニ</sub>而食<sub>ハ</sub>也。

（書き下し文：馬を<sup>やしな</sup>食ふ者、其<sup>そ</sup>の<sup>よ</sup>能く千里なるを知りて<sup>やしな</sup>食はざるなり。）

（現代語訳：馬をやしなう者は、その馬が千里を走ることができることを知ってやしなっているのではないのである。）（星川 1956: 225）

ここでは、漢文（原文）ではなく、書き下し文（日本語としての読み方）を問題にする<sup>(29)</sup>。この「其の能く千里なるを知りて食はざるなり」は、わかりにくい。そのまま読むと、(7a)「その馬が千里を走ることができることを知」っていて、「その馬」を「やしな」わない（否定されるのは、「やしなう」のみ）、ととれてしまう。しかし、こ

ここで言っているのは、(7b)「その馬が千里を走ることができることを知ってやしなっている」のではない（全体が否定される），ということである。両者の構造は，次のように示せるであろう。



この両者も，(6)と同様に，その違いをイントネーションで区別することはできない。

#### 4.2.4 和歌の句切れ

最後に，和歌の句切れを取り上げておく。

和歌を読み解くときには，「句切れ」に注意しなければならない。句切れは，意味上の切れ目であり，歌全体の解釈に関わり，句切れの位置によって歌のリズム（五七調か七五調か）が変わってくる（林巨樹・安藤千鶴子編『新全訳古語辞典』大修館書店 2017: 354）。しかし，「学生たち」は「短歌を上上の句と下の句に分ける習慣が染みついている」ために，（意味をあまり考えずに）和歌を「三句切れ」（七五調）に読んでしまいうやすいようである（梶川 2016: 131）。

その例として，『万葉集』巻一の「天皇御製歌」（28 番歌）を取り上げてみる（この歌は，「古今和歌集」や「百人一首」では，「春過ぎて 夏来にけらし 白妙の 衣干すてふ 天の香具山」となっている）。

(8) 春過ぎて 夏来<sup>きた</sup>るらし 白<sup>きた</sup>たへの 衣干したり 天<sup>あめ</sup>の香具山

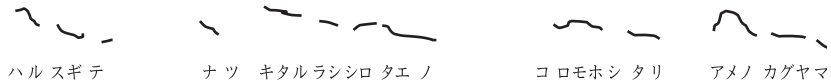
（原文「春過而夏来良之白妙能衣乾有天之香来山」）

（訳：春が過ぎて 夏が来たらしい。真っ白な 衣が干してある あの天の香具山に）（小島憲之・木下正俊・東野治之 校注・訳『新編 日本古典文学全集 6 万葉集①』小学館 1994: 42）

この歌は，「二句切れ」（五七調）であるが，これを上の句と下の句とに分けて（三句

切れで) 読むと、「夏来たるらし」と「白たへの」とがつながり、「衣」の枕詞である「白たへの」と「衣」とが切れて、意味がわかりにくくなってしまう。以下に、(8a)上の句と下の句とに分けて読む場合と、(8b)『新編 日本古典文学全集』の解釈(訳)に従って読む場合とのイントネーションの違いを、筆者の発話によるピッチ曲線で示しておく(6bには、句読点を打っておく)<sup>(30)</sup>。

(8a) 春過ぎて 夏来るらし 白たへの 衣干したり 天の香具山



(8b) 春過ぎて、夏来るらし。白たへの衣干したり、天の香具山。



また、別の例として、福田(2015: 148)から、『古今和歌集』巻一「春歌上」にある、「題知らず、詠み人知らず」の歌(32 番歌)を挙げておく(歌の表記、訳は福田による。ルビは省略する)。

(9) 折りつれば袖こそ匂へ 梅の花ありとや ここに鶯の鳴く

(訳: (梅の枝を) 手折ったせいで(その香で) 袖が匂っていることだ。梅の花があるかと思ってか、ここ(私の袖)で鶯が鳴いているよ)

(なお、小沢正夫・松田成穂 校注・訳『新編 日本古典文学全集 11 古今和歌集』小学館 1994: 41 による現代語訳は、「花を折ったのだから、私の袖に匂いが移ってしまったのだが、花がある訳ではないのに、梅の花がここにあるのかと思って、鶯が鳴きにくるよ。」)

この歌は、二句の「袖こそ匂へ」が係り結びになっているため、ここに意味の切れ目がある。これを、「袖こそ匂へ梅の花」と続けて、三句切れで読むと、意味がわかりにくくなってしまうであろう。

## 5. おわりに

これまで見てきたように、文構造の違いは、意味の違いになり、それが読み方の違いになる場合がある。その文をどう声に出して読むかを考えることは、その文の構造(文

法)や意味を考えることになる。筆者は、音読を考えることによって、文法について考え、文法を学ぶことができるのではないかと考える。もちろん読み手が文構造や意味を考えて読んだつもりでも、必ずしもそれが聞き手に伝わるわけではない。とはいえ、ただ声に出して読むのではなく、文構造や意味を考えて読むことは、文法への理解を深めるのに役立つであろう。4.2.3 に挙げた例などは、文構造(意味)の違いを音読で表すことはできないが、読み分けについて考えることが、文法の学習につながるのではないと思われる。別の例を挙げれば、たとえば、『枕草子』第一四六段「うつくしきもの」の第2文「雀の子の、ねず鳴きするにをどり来る。」(秋山編 2013: 210 による現代語訳は、「雀の子が、(人がチュッチュッと)ねずみの鳴きまねをすると(ちょんちょんと跳ねて)踊るようにやって来るの。)」などを、「雀の子のねず鳴きする」「雀の子の」が「ねず鳴きする」の主語)と誤解されないように、「雀の子」と「ねず鳴きする」の間にポーズをおいて音読したとしても、それが聞き手には伝わらないかもしれない(この文は、主節「雀の子の をどり来る」の主語と述語との間に、従属節「ねず鳴きするに」が入り込んだ「袋小路文」(構造を取り違えやすい文)である)。こういったものでも、音読の仕方を考えることは古典文法学習につながる(古典文法を学習するうえでの、ヒントやきっかけになる)のではないと思う。

なお、本稿で見てきたもののほかに、引用(会話文、消息文、心中思惟)や、いわゆる「はさみこみ」(挿入)なども<sup>(31)</sup>、声の大きさや調子を変えたり、声色を使ったりして、(他の部分と区別して)示すことができると思われる。しかし、これらについては、機会を改めて論じたい。

#### 《注》

- (1) 川島・安達(2004)、川島・齋藤(2017)など。
- (2) 小学校でも、古典を含む文語文の音読は行われる。『小学校学習指導要領』(平成20年3月)「国語」には、「易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。」「〔第3学年及び第4学年〕2 内容〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕(1)ア)」、「親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること。」「〔第5学年及び第6学年〕2 内容〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕(1)ア)とある。
- (3) 新『中学校学習指導要領』(平成29年3月)「国語」では、「音読に必要な文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読し、古典特有のリズムを通して、古典の世界に親しむこと。」「〔第1学年〕2 内容〔知識及び技能〕(3)ア)」、「作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界に親しむこと。」「〔第2学年〕2 内容〔知識及び技能〕(3)ア)」、新『高等学校学習指導要領』(平成30年3月)「国語」では、「文章を読み深めるため、音読、朗読、暗唱などを取り入れること。」「〔言語文化〕3 内容の取扱い(3)イ)」、「古典を読み深めるため、音読、朗読、暗唱などを取り入れること。」「〔古典探究〕3 内容の取扱い(2)イ)となっている。



- (4) 『高等学校学習指導要領解説 国語編』(平成 22 年 6 月)「国語総合」には、「音読、朗読、暗唱の指導は、小学校及び中学校においても重視している。この言語活動については、活動そのものが目的となることがないよう、『文章を読み深めるため』ということに留意する必要がある。」(4 内容の取扱い (4)イ) とある。
- (5) これとは別に、前田 (2001: 178) は、「音読」を、「伝達手段として、また理解の補助手段としての『朗読』」と、「文章のリズムを実感させるために音吐朗々と誦する『朗誦』」とに分けている。
- (6) たとえば、「暗誦・朗誦」用のテキストである、齋藤孝『声に出して読みたい日本語』シリーズ(草思社 2001 初刊)は、「シリーズ累計 260 万部突破」(草思社文庫版 2011: 222)し、小学生用の音読教材である、陰山英男『陰山メソッド 徹底反復「音読プリント」』(小学館 2004)は、「46 万部を突破した」(『陰山メソッド 徹底反復 文章読解プリント 名文編』2013「内容紹介」)という。
- (7) 沖森編 (2012: 3) には、「歴史的仮名遣いで書かれた文章は、現代語の発音に従って…読む。」と明記されている。
- (8) 古典ギリシア語の入門書である『CD エクスプレス 古典ギリシア語』は、「言語学的に推定されている古典ギリシア語の発音を試み」ており、「付属の CD で、荘重かつ美しい古代の発音が楽しめる」という(荒木 2003: 4)。
- (9) 大島 (2009) を参考にした、唐代長安音(推定)による、杜甫「春望」、孟浩然「春曉」は、動画共有サイトの YouTube で聞くことができる(2018 年 6 月現在)。
- (10) 以下、段数は、すべて『新編 日本古典文学全集』による。
- (11) 森 (2015: 2) では、「春は」の「は」を「ワ」(ハ行転呼音)としている。
- (12) 金田一春彦の復元音(『朗読源氏物語：平安朝日本語復元による試み』大修館書店 1986)による『源氏物語』「若紫」(一部)の朗読(関弘子朗読)は、動画共有サイトの YouTube で聞くことができる(2018 年 6 月現在)。なお、古くは、物語を含め、文章は音読されていたとされる(玉上 2003: 64, 76)。
- (13) 沖森編 (2010: 32) 参照。
- (14) 以下に挙げるピッチ曲線は、すべて筆者の発話のものである。筆者が各意味を伝えるべく各文を読み上げたときの音声を、フリー音声分析ソフト「Wavesurfer」の「Speech analysis」で分析し、表示された「Pitch」をトレースしたものを挙げる。
- (15) 文節の提唱者である橋本進吉は、「文節は、…実際の言語に於て、いつでも続けて発音せられる最短の一句切であつて、そのアクセントが一定してゐる。実際、アクセントは、文節を単位として考察した場合に一定した形を示す」と述べている(橋本 1934: 10)。
- (16) このほかの例は、阿久津 (2009) を参照。
- (17) 以下、音声波形(音の強さ)は示さない。(4ac)と(4ad)については、筆者は、「あけぼの」を強調して発音しているが、これはピッチ曲線の高さに現れている。
- (18) 句読点を含め、表記は、教科書・書籍によって異なる(『新編 日本古典文学全集 18』の「凡例」には、「本全集の一般の方針に従い、読解の便宜のために、…句読点を切り、濁点を加え、」とある)。特に読点の位置は、文の構造だけではなく、語の認識のしやすさ、息継ぎのしやすさなどによって決められるため、ゆれが起こりやすい。樺島 (1985: 143) は、文の構造に基づく読点の打ち方について論じ、「読点を、そこで打つかどうかには、書き手の微妙な気分が作用し、機械的にはいかなないところがある。」と述べている。古典作品の場合、読みやすくするため、たとえば、文の構造上の切れ目に読点を打ち、文節の切れ目にはスペースを入れるなどといったやり方も考えられるかもしれない。なお、亀井 (2017) では、例文(古典作品)が文節で分かち書きされている。
- (19) 本文を『新編 日本古典文学全集』によっている教科書にも、同書とは異なる句読点の打

ち方をしているものが見られる（大修館書店『新編国語総合 改訂版』、数研出版『高等学校国語総合』など）。これらでは、「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく、山ぎは少しあかりて、…」のようになっていて、「…なりゆく」で文を切っている（「なりゆく」を終止形としている）ようにも見えるが、たとえば、大修館書店『新編国語総合 改訂版』などでは、(4ad)に挙げた山口（2008）の現代語訳を載せていて、「…なりゆく」を連体修飾成分とする解釈をとっているようである。ほかに、本文を「…なりゆく、…」としているものの現代語訳には、「だんだん白んで行くと…」（池田亀鑑『全講枕草子』至文堂 1963: 2）、「だんだんと白んでゆくうち、…」（上坂信男ほか全訳註『枕草子 上』講談社学術文庫 1999: 16）、「だんだんとあたりが白んで、…」（角川書店編『枕草子』（ビギナーズ・クラシックス 日本）の古典）角川ソフィア文庫 2001: 11）などがある。これらでは、「なりゆく」について、終止形や連体形本来の用法とは異なるものとして訳している（『全講枕草子』には、『なり行く』に休止をおき、『なり行くに、その山ぎは』の意と解したい。」とある（p.1））。小田（2018: 205）は、「終止形、連体形によって文が中止されているとみられる句型がある。」としている。

- (20) 「春はあけぼの。」（これで1文とする）の文構造の解釈については、「春はあけぼの（いと）をかし。」の「（いと）をかし」の省略とする説（訳：春はあけぼのがいい。）、「春はあけぼのなり。」の「なり」の省略とする説（訳：春はあけぼのである。）、もともとこれだけ（省略はない）とする説（訳：春はあけぼの！）などの諸説があるが（田中重太郎 1972: 24）、これらを音読によって読み分けることは難しいと思われる。
- (21) NHK の教育番組である、「10 min. ボックス 古文・漢文」「枕草子（清少納言）」（加賀美幸子朗読、出典『新編 日本古典文学全集』）、「おはなしのくにクラシック」「枕草子（清少納言）」（虻川美穂子出演）でも、(4ad)のように朗読している。両番組は、NHK for school のサイトで視聴することができる（2018 年 6 月現在）。
- (22) 筆者は、(5a)の「日くらし」は動詞として中高型（-2 型）に、(5b)の「日くらし」は副詞として平板型に読んでいる。
- (23) NHK の教育番組である、「10 min. ボックス 古文・漢文」「徒然草（兼好法師）」（加賀美幸子朗読、出典『新編 日本古典文学全集』）、「おはなしのくにクラシック」「徒然草（兼好法師）」（えなりかずき出演）でも、(5b)のように朗読している（前者では、「日くらし」を中高型（-3 型）に発音している）。両番組は、NHK for school のサイトで視聴することができる（2018 年 6 月現在）。
- (24) 「国語総合」の教科書には、『徒然草』の本文を、『新編 日本古典文学全集』によっているものと、『日本古典文学大系』（西尾実校注『日本古典文学大系 30 方丈記・徒然草』岩波書店 1957）によっているものが多い。前者の表記は「日くらし」（読点なし）、後者の表記は「日くらし、」（読点あり）であるが（いずれも「終日」の意味としている）、前者によっていて読点のあるもの（筑摩書房『国語総合』）、後者によっていて読点のないもの（桐原書店『国語総合』、第一学習社『高等学校 標準国語総合』）も見られる。
- (25) 『新編 日本古典文学全集』（JapanKnowledge 版）で検索したところ、たとえば、次のようなものがあつた。『蜻蛉日記』『日暮らしがたし』（底本「日くらしがたし」）（訳：いたたまれぬ思いで過した）。『源氏物語』手習「日暮らしたまひし」（訳：一日じゅうそこでお過しになりました）。『夜の寝覚』巻二「日暮らして」（訳：終日）。
- (26) 『新編 日本古典文学全集』（JapanKnowledge 版）で検索結果したところ、『枕草子』に「日ぐらし」は、この「日ぐらし見るに」（第二六〇段）（訳：一日中）の1例しかなかった（他の表記、他の活用形のものもなかった）。なお、『新編 日本古典文学全集』では、『枕草子』に限らず、中古文学作品の「日ぐらし」の「ぐ」に濁点を打っている（仮名表記のもの）。しかし、『徒然草』については、底本に従い、「日くらし」としている（『新編 日本古典文学

全集 44』p.82)。

- (27) 「並びの修飾」は、「対偶中止法」とも（否定に限っては、「対偶否定法」とも）呼ばれる。これについては、飯田（2016: 15）、小田（2018: 54）なども参照。
- (28) 高校の「国語総合」の教科書などでは、「其能千里」を「其ノ能ノ千里<sup>ナルヲ</sup>」と読んでいる。こちらの読み方のほうが一般的なようである。前野・江連（1987: 337）では、「能<sup>ノウ</sup>」と読むことについて、「この文では『能』をすべて『能力』を表していると考える。」と述べている。
- (29) (7)の漢文（原文）に使われている文型「不～而…」は、㊦「～シテ…（セ）ず」（「不」は「～而…」を否定する。訳：～して…するのではない）と、㊧「～（セ）ずシテ…（ス）」（「不」は「～」のみ否定する。訳：～しないで、…する）という2つの読み方ができる（藤堂明保ほか編『漢字源 改訂第五版』学研プラス 2011: 18、天野成之『漢文基本語辞典』大修館書店 1999: 293）。(7)は、㊦によって読んでいるが、㊧によって読むこともできる（鎌田ほか 2013: 258 は、「『不<sup>シテ</sup>知<sup>ラ</sup>其ノ能ノ千里<sup>ナルヲ</sup>而食<sup>フ</sup>也』と読み、『その能力が千里も走ることを知らないで飼育している』と解することもできる。』としている）。この文の場合、これでも大意は変わらないが、意味が大きく変わる場合もある（加地 2010: 460 などを参照）。
- (30) NHK の教育番組である、「10 min. ボックス 古文・漢文」「万葉集（加賀美幸子朗読、出典『新編 日本古典文学全集』）では、(8a)のように（三句切れで）朗読している。同番組は、NHK for school のサイトで視聴することができる（2018 年 6 月現在）。
- (31) 「はさみこみ」は、佐伯梅友の名づけた用語で、佐伯（1988: 197）は、たとえば、『古今和歌集』巻八「離別」369 番歌の「今日別れあすはあふみと思へども、夜や更けぬらむ、袖の露けき」（『新編 日本古典文学全集 11』p. 158 による現代語訳は、「今日送別をしてもまた明日は会える身の上の近江介を送るのだと思っても、夜が更けたからなのか、なんとなく袖がしめっぽいいよ。」）の「夜や更けぬらむ」などを『「はさみこみ」の一種』としている。引用や「はさみこみ」については、沖森編（2012: 133）なども参照。

#### 参考文献

- 秋山虔編（2013）『シグマベスト 理解しやすい 古文』文英堂
- 阿久津智（2009）「あいまい文の構造と音調」『立教大学日本語研究』16 立教大学日本語研究会
- 安達忠夫（2017）『素読のすすめ』筑摩書房（初刊 1986 講談社）
- 荒木英世（2003）『CD エクスプレス 古典ギリシア語』白水社
- 飯田晴巳（2016）「古典解釈のための文法指導：古文の読み方・教え方」『品詞別 学校文法講座 第八巻 古典解釈のための文法』明治書院
- 有働裕（2015）「教材としての『春はあけぼの』：『枕草子』初段の冒頭を読むということ」『国語国文学報』73 愛知教育大学国語国文学研究室
- 有働裕（2017）「教材として『徒然草』をどう生かすか：新たな可能性の追究」『国語国文学報』75 愛知教育大学国語国文学研究室
- 大島正二（2009）『唐代の人は漢詩をどう詠んだか：中国音韻学への誘い』岩波書店
- 小川剛生（2015）『新版 徒然草』（現代語訳付き）KADOKAWA
- 沖森卓也編著、阿久津智・井島正博・木村一・木村義之・笹原宏之（2010）『日本語概説』（日本語ライブラリー）朝倉書店
- 沖森卓也編著、山本真吾・永井悦子（2012）『古典文法の基礎』（日本語ライブラリー）朝倉書店
- 小田勝（2018）『読解のための古典文法教室』和泉書院
- 風間喜代三（1998）『ラテン語とギリシア語』三省堂
- 加地伸行（二疊庵主人）（2010）『漢文法基礎：本当にわかる漢文入門』講談社（初版 1977 増進

- 会出版, 新版 1984 増進会出版)
- 梶川信行 (2016)「万葉歌から何を学ばせるか」上代文学会監修, 梶川信行編『おかしいぞ! 国語教科書: 古すぎる万葉集の読み方』笠間書院
- 加藤郁夫 (2008)『国語 (古典)「古典重視」にひそむ危うさ』竹内常一・子安潤・木村涼子・阿部昇・加藤郁夫『2008 年度版学習指導要領を読む視点』白澤社/現代書館
- 樺島忠夫 (1985)「表記符号の使い方」『事典日本の文字』大修館書店
- 鎌田正監修, 江連隆・青木五郎 (2013)『シグマベスト 理解しやすい漢文 新課程版』文英堂
- 亀井孝 (2017)『概説文語文法 改訂版』筑摩書房 (初版 1955 吉川弘文館, 改訂版 1957 吉川弘文館)
- 川島隆太・安達忠夫 (2004)『脳と音読』講談社
- 川島隆太・齋藤孝 (2017)『素読のすすめ』致知出版社
- 金田一春彦 (2001)「奈良・平安・室町時代の日本語を再現する」『日本語音韻音調史の研究』吉川弘文館 (1986 講演)
- 小池清治 (2005)『『徒然草』の文体は明晰か?』『文体探究法』(シリーズ「日本語探究法」6) 朝倉書店
- 小西甚六 (2016)『国文法ちかみち』筑摩書房 (初版 1959 洛陽社, 改訂版 1973 洛陽社)
- 小森潔 (2012)「国語教育の中の『春はあけぼの』」『枕草子: 発信する力』翰林書房 (初出 2011 『枕草子: 創造と新生』翰林書房)
- 佐伯梅友 (1988)『古典読解のための文法 上』三省堂
- 佐藤幹二 (1937)「春はあけぼの (枕草子)」『国文学 解釈と鑑賞』2-7 至文堂
- 杉藤美代子・森山卓郎 (2007)『音読・朗読入門: 日本語をもっと味わうための基礎知識』岩波書店
- 武田博幸・榎森祥悟 (2017)『読んで見て覚える 古文攻略マストアイテム 76 <常識・文法・和歌>』桐原書店
- 田中重太郎 (1972)『枕冊子全注釈 1』(日本古典評釈・全注釈叢書) 角川書店
- 玉上琢彌 (2003)「物語音読論序説: 源氏物語の本性 (その一)」『源氏物語音読論』岩波書店 (初出 1950 『国語国文』19-3)
- 橋本進吉 (1934)『国語法要説』(『国語科学講座』第 11 輯 VI 国語法) 明治書院
- 福田孝 (2015)『古文を楽しく読むために』(シリーズ日本語を知る・楽しむ I) ひつじ書房
- 星川清孝 (1956)『古文真宝選新解』明治書院
- 前田愛 (2001)「音読から黙読へ」『近代読者の成立』岩波書店 (初版 1973 有精堂)
- 前野直彬・江連隆 (1993)『チャート式シリーズ国語 I・II 基礎からの漢文 三訂版』数研出版 (初版 1982, 最新版 1987)
- 森博達 (2015)「復元音で読む古典: 卑弥呼から徒然草まで」『日本語学』34-10 (2015 年 8 月号) 明治書院
- 柳田征司 (2016)『日本語の歴史 6 主格助詞「ガ」の千年紀』武蔵野書院
- 山口仲美 (2008)『すらすら読める枕草子』講談社
- 山本真吾 (2016)「分野別 <古典解釈と文法>: 漢文訓読の語法」『品詞別 学校文法講座 第八巻 古典解釈のための文法』明治書院
- 渡辺知暁 (2012)『朗読の教科書』パンローリング

(原稿受付 2018 年 6 月 28 日)